

# 川柳雜誌

大正十三年五月三日第三種郵便物認可  
大正十四年五月一日發行(每月二回一日發行)

川柳雜誌 (十六號)



號五第 卷二第

川柳雜誌 第二卷 第五號 (大正十四年五月一日發行) 目次

句作と評論

近作

一句を抹殺する迄

俺の部屋

近作柳樽

花童子歡迎句會

二柳子居小集

郊外電車 溫泉行脚

川柳塔

輝翠、古城山、双柳、松郎、かほる、馬行、柳路、多聞、雅幽  
光太柳、葎乃女、葵豆、柳路、二柳子

句評

川柳家戸籍調べ

編輯後記

麻生路郎(三)

麻生路郎(一)

蛭子省二(二)(八)

安川久流美(二)

麻生路郎選(四)

橋本二柳子記(三)

麻生路郎(二)(五)

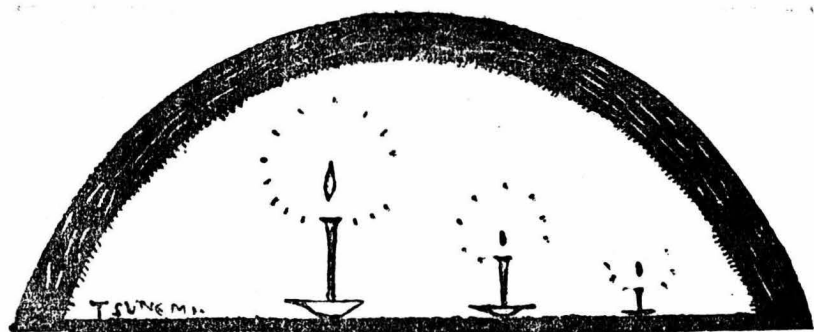
吉岡鳥平(六)

同(六)

同(三)

同(三)

塚崎松郎(三)



近作

麻生路郎

戸締りの憂鬱七度三分半  
 女の笑ひごね 幾つかさなりあひぬ  
 殺すここにきめて其の夜は寝たりけり  
 拜まれて女は泊まる氣にもなり  
 貧しさの焦點をみる蒲團棉



# 句作と評論

麻生路郎

(一)

川柳に議論は要らぬ。黙つて作れ。議論通りの句が作れては  
ならないぢやないか。斯うした言葉が長い間繰返されて来た。

しかし、議論は相變らず絶われないばかりか段々多くなつて來  
た。黙つて作れと叫んでゐた人々でさへ時々沈黙を破つてゐる  
のを見上げる。そして議論通りの句が作れてゐないではないか  
と嘲罵を恣にしてゐた人々さへ議論通りの句が作れてゐな  
いを見上げる。

果して川柳に議論は要らぬものか。黙つて作つてさへるれば  
いいものか。議論通りの句が作れてゐなければ議論をしてはな  
らないものか。私は否、否、否と叫ばざるを得ない。

(二)

従來、川柳に議論は要らぬと叫んでゐた人達について考察す  
れば、彼等には議論するだけの思想をもたなかつた場合が多

い。もごく、遊戯的立場から川柳を弄んでゐた人達に議論の  
あらう筈もなかつたが、少し毛の生へた人達も、少い手強い敵  
手を發見する時には、必ずこの川柳に議論は要らぬ。黙つて作  
れ、議論通りの句が作れてゐないではないか、といふ墮擧に身  
を潜めて僅に敵體を脱してゐたのであつた。

そして彼等の應戰ミ云へば三行か五行か半頁足らずの揚足取  
的毒瓦斯を發してゐたのであるから心あるものは到底お相手は  
出來なかつたのである。

そんな状態であるがために、議論らしい議論は何時までも生  
れて來なかつた。さうした状態が川柳の藝術運動をさだけけ阻  
碍したか知れない。

(三)

川柳は今日、天保調の悪夢から全く離脱してゐるにもかゝら  
らず、社會からは相變らず天保時代の川柳と同視されぬまでも

蔑視されることに於ては大した相違を發見するこゝが出来ないではないか。

これは果して誰の罪か、原因は何處にあるか。川柳家の深思すべき問題ではあるまいか。

(四)

ひゞり、川柳云はず、他の文藝に於てもさうであるが、研究なく、批評なきところに發達はのぞまれないのであるこゝは私の言を俟つまでもあるまいと思ふ。

一つの名議論は他の多くの作家の句作態度の上に何等かの影響なくして止むものでなく、更にそれ等の句によつて新しき議論が生まれ、相互に刺戟されてそのもの、内容を價値づけるのであるから、眞摯なる議論に對しては寧ろ大いに歓迎せなければならぬのである。例令黙つて作る人達にしても必ずそれ等の議論には耳を藉さなければ句作上の向上はのぞまれないものであるこゝは斷言を憚らぬ。

(五)

かく云へばきて、私は、あらゆる川柳家に大いに議論を闘はせよと叫ぶものではない。人自ら性狀を異にしてゐるのであるから作句の天稟を有する人々にして、議論するこゝの拙なる人もあれば、それ等の作品に對して謙し論するこゝの炯眼を有し、犀利なる筆を有するも自ら作句するこゝには、その技これにこもなはぬものもあるのであるから自ら自己の素質につき

て知るの要あるこゝを思ふのである、批評家としての素質なき人々の議論は徒らに斯界を混亂せしむるに過ぎないばかりでなく自己にも益なき業である云はねばならぬ。

近時、大正川柳誌上に掲げられた、田中五呂八氏の『日車氏の藝術』の如きは未だかつて柳壇に見ざる名論でなければならぬ。私は斯うした眞面目な議論の續出を歡ぶものである。五呂八氏が謙讓するが如く自ら作句して名句を得ないからして『日車氏の藝術』の一文が價値なきものとは何人が斷言し得やう

(六)

要するに、批評家は批評家として冷靜に、正臨に眞摯に論ずるこゝを忘れなければ一句を遺さずとも柳壇を益するこゝ甚大である。作家も又作家としての天分を發揮するこゝに努めなければならぬのは勿論であるが、彼等批評家の言に耳を藉し、自己の天分を發揮する上の營養分を吸收するこゝにつきめなければならぬのである。

從來の如く、作家にして評論家、而して柳誌の經營者であるこゝはます／＼擴大しつゝある柳界に對して頗る至難のこゝではあるまいか。この意味に於て黙つて作り得ぬ作家は大いに筆陣を張り黙つて作り得る作家はそれ等の批評によりて自己の人生を凝視する上の解剖刀をなし、又柳誌經營の才ある人々は、それ等の作家、評論家のために大いに盡さんか。將來の柳壇が如何に發達すべきかは期して待つこゝが出来やう。



今に氣がつかふ放つまけ放つておけ  
氣がゝりか尻を鏡に向けてなで  
春が來た女から先き春が來た  
三錢をまさか惜んでほるまい  
かきなでた櫛の跡から年が見ぬ  
竹の皮誰か見晴し褒めた跡  
詫びる時期失したまけを遠ざかり  
俺だけに言へミ力を貸すつもり  
この方は如何ミ傘屋ばつミ開け  
僕の見るところはさうでない意見  
隙間洩る風に火鉢を丸く抱き  
心配をするなミ家出書き残り  
親親が寄るミ淋しい未亡人  
無利息のお金で御無理御尤  
取替へて貰ふお金は高が知れ  
馬鹿よばはりされて女房のおこなしさ  
忍術の方へ丁稚は行くミきまめ  
まんざらでない言ひ分へ貸してやり  
クレオンを買へばさつさミ歩くなり  
外出に消盡念に念を要れ  
女湯のおれの子供の泣いた聲  
此の通りやんちやに成つた二三年

同同同同同同同同同同同同同同同  
大阪  
同同同同同同同同同同同同同同同  
乾坤

貸ボート今日もおんなじ顔が見ぬ  
要するにブルジュア級の坊主刈  
ちこのろけ話も交る司法室  
洒落たこゝぬかせミ伯父さんの微笑  
一口も呑めない膝の堅さなり  
白木屋もよし三越もよし妾  
母親の眼に過ぎたもの英和辭書  
初旅の身に菜の花が眼に泌みて  
小切手が一枚それが手切金  
宮様に只恐れ入り恐れ入り  
御一緒に鯨鯨立ちをやりませう  
道樂が過ぎて上爛屋をはじめ  
目をむいて實は泣きたい酒を飲み  
ボケツトへ兩手を入れて喫ふ煙草  
ビルディング人間は皆疲れ過ぎ  
叩かれた巡查の肩に埃が出  
提灯を踊らせて行く空車  
間隔を保つて牛車續くこゝ  
間違ふた事やおまへんかミ見据へ  
昨年の例に交渉まじまらず  
その間の事情を知つて居て淋し  
まだ子供らしくおさがよく似合ひ

同同同同同同同同同同同同同同同  
山口吐露樓  
同同同同同同同同同同同同同同同  
東京盜泉

竹榮







# 一句を抹殺する迄

省 二 一 生

せつばつまつて糞の日蓮

先年作つた此の句を今年初の某誌に發表した處、計らずも日蓮宗信者の川柳家より句意の如何に因つては一論議せねばならぬとの照會があつたから、詳細説明して寄こせよと知人から通信が來た。尙ほ日蓮信者で研究者たる某氏も、川柳は徒らに人身攻撃を好むものだ云々不滿である旨も書き添はられて居た。そこで自分は、大變好い研究問題が飛込むだものだ、甚だ意地の悪い様ではあるが句解を通報する前に日蓮宗信者の川柳家の御意嚮を拜承する方が多大の参考となるを思ひ、御高見を漏らして頂き度い其上に句意も申上ぐる事を願出て置いたが、此稿を草す

る迄には遂に夫れを知り得ないのである。因に此の事件は全く離れ、假定の事項にして即ち(一)句意、(二)信仰と詩の關係を考究して見たい、而して總ては當初の問題の回答ともならば、双方の好都合である。

藝術は最大多数の幸福を理想とするものだと言ふしも、そんなに誤りではなからう。此意味に於て政治もそうだ。宗教も亦そうだ。然し夫れは理想であつて一部分については、信仰と詩が一致せぬ場合が多々あり、日蓮を罵倒した川柳を作つたからして川柳は下らぬものだと言はず、従つて作句者も信仰的に日蓮論を吹つ掛けられては甚だ戸惑ひせねばなら

ぬ。某氏の句に

こやつ日本人かと思ふメソヂスト

云ふのがあつた。基督信者のいやに臭いのを咏まれたので、信者は一讀憤慨するかも知れぬが、自分なご公平な立場から(自分はミツシヨン、スクールに教育された事もある)鼻持ちならぬ手合が仲々多いのを痛感し、知己の信者に短冊に認めて送つた事もある。或は此句に依り謙遜な信者の反省の料となるものがあるかも知れない。又某氏の

十字架の上でキリスト愚痴を言ひ

の句がキリスト信者の非常な立腹を買つた云々仄聞した。

一柳雨氏曰假りに日蓮を誹謗した句を作つたとして日蓮宗の人から抗議を申込れる云々窮屈な世の中では困つたものです。夫では親鸞の悪口を云つたら眞宗黨から耶蘇を冷かしたらクリスチヤンの詰問に逢ふ云々の川柳家はやり切れない。家康が嫌ひだから家康を

けなすも光秀が好だから光秀をほむるも其人の自由勝手に側からいざこざ言ふべきものはあるまい。尤も現存してゐる人物を暴に誹謗することは別問題と思ふ。

一路郎氏曰、私は曾てキリストを句にした事があつた。

キリストは今日も手品を一つやり此句を信者が見たら怪しからぬと言ふかも知れぬが之れは一つの観方であつて神としてのキリストを抹殺する爲めでもキリスト信者を罵倒する爲めでもなかつた。そんな有目的の爲めに決して作句したのではなかつた。従つて何等の抗議すら受けなかつた……小説では時々モデル問題を惹起するが川柳の如き短詩型のものではさうした問題を惹起しやうがない。若し夫れ川柳の一句一句の内容を手近なモデル問題として取扱つたならば昔の川柳家の多くは下女や居候から毒薬でも吞されてゐる

であらう……日蓮の信仰者が日蓮を罵倒した句を見れば不快を感ずる事は想像に難くない。或は其作者を憎むかも知れぬが夫れは感情の問題であつて作品に對する文藝上の價値は自ら異つて居る筈である……寧ろ眞の日蓮を解する様に教導導くのも一策であらう假に指導した處で作者は到底眞の日蓮を解し得ないかも知れぬ。川柳家としては其作者の觀たる日蓮であるより外に仕方があるまい。

さて自句は日蓮上人の罵倒吟なる乎、讚仰吟なる乎と言ふに自らは豈に諷らむや後者のつもりで作つたので、其表現辭句が頗る拙劣であつた爲め疑問を惹起して一時的たりとも信者のお方々の感情を害したのには申譯なく思つて居る。自分の敬尊する久良岐氏の御意見に因り遂に抹殺する事に決したのであるが、一應は作句の経路を述べねばならぬ。自分は日蓮宗信者ではない。又研究者で

もないから、其の多くを知らない、今書棚を採すに僅かに日蓮上人文集、楞牛全集がある、念の爲の讀むでみた、上人曰「法華經の爲めに此の臭き頭を刎られむは砂に黄金を代へ糞に米を代ふる也」(此種の意味のものは他にもある)率直單簡に申すなら之れを十四字詩に纏めてみたに過ぎない、高山博士の主張をさき「死は素より我の期待するところは臭骸を法華經に捧ぐるは糞土を以て黄金に換ゆる也」(或かの小島の主の威きむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき)の一齣にあるやうで「せつばつまつて」の七子に因り、上人が守護國家論さか立正安國論さか乃至四箇言の提説の如き、進取的に昇善最勝の大獅子吼の眞骨頭を誣はむことももの「糞の日蓮」は全く上人自らのお言葉であるので、彼の親鸞上人が自分は愚人ぢやも申されたに比し、糞にたこへられたのは興味があるではないか。尙ほ之れは作句者以外には無關係の事で

はあらうが實は川柳連句中の一短句とし  
て作つたもので連句が進まず獨立さして  
も無理はなからうと發表したわけ、上七  
は前句を受けた語勢も加はつて居るので  
ある。夫れに元來十四字詩は印象の朦朧  
たる處、前後の事情關係即ち氛圍を模  
索せしめ玩味せしむる點に缺點と長所が  
存するので、讀者に同情なくては妙味が  
乏しい。江戸坐俳人が好むで試みたのも  
決して謂ない事ではない。

一柳雨氏曰く諸書を引用しての御説明に  
より仄氣に解りました句の一部なり  
とすれば其前後の關聯にて猶更明瞭す  
るだらうと思ひます。夫により上七の  
語勢も日蓮を謳歌した方の意味にもな  
る乎と思ひます。下七を直に糞の意味に  
なごか苦痛の餘りの脱糞なごの意味に  
こる事は寧ろ無理であるまいと思ふ。  
一卯木氏曰く引用された糞に就しの文章  
丈では正直の處小生には判斷が出来  
ぬ……餘情ある十四字詩は判らぬと思

ふ句の表面を見た丈で日蓮を罵倒した  
ものご考へたのであらう「せつば詰る  
」窮迫するといひ糞の日蓮といひ怎う  
も日蓮を罵倒したやうに思ふかも知れ  
ぬ。

一路郎氏曰私は詠史川柳としてキリスト  
の奇蹟を前の如く詠むだ。省二氏の句  
も亦之に類するものであらうと思ふ。  
上人の言葉を知つて居る人から見れば  
決して罵倒は受取れまいが知らぬ人  
達には多少誤解はするかも知れぬけれ  
ど其言葉を知らねば味も何にもない句  
であるから棄て顧みられない句である  
夫れ丈け損なごころがある。私の今の  
川柳觀から言へば句の價値は餘程減殺  
されて私のキリストの句の如くである  
私はもうあゝした觀方に依つて詠む事  
を川柳作句に於ける第二義第三義のも  
のだと思つてゐる。省二氏が藝術的價  
値を充分認められるならば別にひつこ  
める必要はあるまい。然し僕の考へて

居る様に第二義的に解釋する事に賛成  
されるならば信者が不快に思ふ句を此  
際抹殺さればよからうと思ふ。さう  
する事は單に人間同志の感情問題を融  
和する上の話で決して文藝上の問題と  
してではないから作者が存在させるこ  
云ふ意思であれば仕方があるまい。

一久良岐氏曰罵倒に受取れ申候「神の最  
後へ」も「セツナグソラタレタ」も  
より受取れ申不候貴解により貴意のあ  
る處はわかれご上七がよろしからず「  
切迫つまりて糞」もより外うけられぬ  
事に候貴意の如くんば拙者ならば「糞  
にたごへて首の日蓮」なごあるべしと  
存申候由來愚人を罵しるに「袋糞」も  
して支那人は昔から申候事故必ずしも  
「糞の日」も抽出して言ふは中り不  
申候

以上の如くお願ひした四氏の御高説を總  
合するに、自分の意のある處は御了解が  
仰けたやうで、修辭上盡くさぬ點が多い

# 俺の部屋

久流美

ミすれば徒らに我見を固持するの要もなく抹殺する事が信者に對しても禮かと思ふ。

(餘談) 川柳ミ宗教の衝突には面白い話もある、曾て臨濟宗を梯子禪ミ罵倒して居た曹洞の坊さんが遊びに來た時

禪宗は坐禪のあみで蚤をさり

の古句を示したら不愉快な顔をして居た因て直に禪宗の二字を消して臨濟ミ書換へた處阿々大笑したので自分は苦笑禁する能はずであつた。

久良岐氏のお話に昨年密教僧の宅で

佛師屋をしても空海くへるなり

ミ書いて示された處此僧ミ萬應主人等は

久良岐の弘法攻撃ミ誤解し「怒」の一幕が演ぜられたそこで

佛教師ミおもひの外に小栗氏

ハラソウギヤアテ腹をたてるな

の狂歌を送られ大笑に相成つたミの事である。

俺の部屋——それはむさくろしい六疊である。柄にも無い『晴耕雨讀』ミいふ文字の白い古木の額がかけてある。寢そべつてそれを見るたびに、昔「修身」か「讀本」に習つた二宮尊徳ミいふ人を想ふ……「丙辰極月」ミいへば明治何年か知らないが、古い「状差」へ「書留」に無心見舞も茲へ入れ「駄句」つたなぐり書きしたのもある——その下に大入袋か四

枚ぶらさがつてゐる。寄席ミ芝居で貰つたものである。然し斯んなものがさがつてゐても一向生活の方は、大人袋ではない。「貧乏」ミ仲のよいのも皮肉だ。寢るのミ書くのはこの六疊です。机一脚に炭取廢物の反古籠が一つ、一人の妻ミ一人の娘も並んで眠るのだ。電氣に笠がない。萬雄君の舊作ぢやないが、別段行水に向ける電氣でもないが、それは一夜酔

つばらちつて歸つた晩、力こぶしで撲つたら破れたのだ。割れるものを割つて見たくなるのは此頃の俺の性分である。アルコール中毒から來た、時節變りの神經衰弱症だミ思つてゐる。さて俺の部屋には最も美むこが一つある。それは金澤で一番川幅の廣い犀川が、直ぐ前だから蛇籠を越した大川の水の音が耳を洗ふやうに響いて來るこである。俺の部屋はざつミこんなもの(四月九日)

# 花童子歓迎句會

北海道の重鎮龜井花童子氏の來阪を機とし、四月十九日午後六時より端の坊に於て歓迎句會を開催しましたところ、多数の出席者を得ました事は、花童子氏並に本社同人一同欣喜に堪へぬ次第であります。當夜の來會者は左の諸氏であります(二柳子記)

花童子、五葉、水府、蚊象、紋太、悠々、好浪子、芳翠、夢路、一路、柳人、元山、萬よし、欣遠子、秀哉、突支坊、きよし、蚊十、一柳、飯山、世間亭、閑路、眠聲、みのろ、屏三呂、露斗、青影子、しげる、乾坤、かすを、俵藏、山月、炭車、のぼる、芦穂、波耶、文亭、岳靜、琴月、一休、悟耶、百石、鷹歩、文錢、路郎、多聞、松雨、羅翠、古城山、松耶、史風、刀三、双柳、幸堂、馬行、二柳子、一洲(祝電)

なほ散會後有志によつて、清水町の北村で同氏の歡迎宴を開く事になり、左の諸氏の御來宴を得たる事を併せて深謝致します。(幹事)

花童子、五葉、水府、蚊象、夢路、文錢、波耶、突支坊、路郎、古城山、二柳子、松雨、幸堂、羅翠、史風、馬行

壁 (兼題)

路郎選

白壁の父亡き後の哀れさよ 眠聲

兒の傳ふ高さに壁がよごれてる 文亭 此家までが同じ家主の壁の色 しける  
手遊びは止め給へ 君壁に耳 萬よし 相黙し乍ら母校の壁を見る 松郎  
親の口それを大家の壁に書き 世間亭 壁下が見えて舞臺の哀れなり 松雨  
桃色の壁が小料理屋に云ふ感じ かほる 御主人の趣味は是見わた壁の色 百石  
すねてるな壁へもたれて動か 兒 柳人 白壁のたゞ堂々國の藏 同  
古寺にたゞ朽ちた壁のびた草 屏三呂 春寒のまだ白壁に残つて居 元山

儲つたらしい隣りは壁を塗り 同  
の壁へすいつくやうに捕手待ち 波郎  
ほろ／＼と落つ悲しみの家の壁 同  
打水の勢ひよくも壁が濡れ 紋太  
白壁へ草鞋で撫でた様な泥 同  
(人)壁の砂落さして叱り直さ。 徹底郎  
(地)壁土を鉢にちぎ持て行かれ 世間亭  
(天)壁を壁迫の中に三味を弾き 水府  
(軸)悲喜交々悲喜交々壁白く 路郎  
壁 花童子選  
嘘一つ隣の部屋へ洩れてくる 幸堂  
親切も嘘に聞く程氣がひがみ しける  
仲人の嘘を二人で笑ひ合ひ 飯山  
嘘だとも今更言へぬはめになり 一休  
良心にそむいてまでも嘘をつき 一柳  
もう嘘を嘘知りつゝ逆らはす 馬行  
嘘さ知りつゝもすがる弱さなり 屏三呂  
末つ子の嘘を母親すけてやり 閑路  
嘘々云ふて妹泣き止まず 岳靜  
嘘にして仲居板場の方へ行き 悠々  
愛嬌を軽うに受けて嘘さ知り 松郎

一三言の嘘をはんなが追ひ廻り 蚊 象

嘘にしておけし障子を閉め 路 郎

知れ切つた嘘に涙を落さすなり 秀 哉

毒婦又嘘は見えぬ涙なり 同

知れきつた嘘へ欠伸をして笑ひ 波 郎

段梯子だんぐり嘘が近くなり 同

嘘つけぬもの三後から話し合ひ 紋 太

嘘をつき乍ら羽織を着てしまひ 同

(人)暴れて来る時分笑ひける嘘 馬 行

(地)嘘々嬉しきさうなる許嫁 水 府

(天)欠

(軸)嘘を云ふ事を習て晝を抜き 花童子

二合 嘘 水 府 選

二合嘘だれだか割つた音をさせ 芳 翠

二合嘘相原へ来て空になり かほる

一次會で行方不明の二合嘘 きよし

二合嘘にして會費はきつちさち 萬よし

友達と逢ふて足りない二合嘘 好浪子

給仕にも同じ二合嘘を呉れ 欣通子

散會の時刻に近い二合嘘 しける

一の谷から二の谷越えて二合嘘 多 聞

二合嘘提げて圓山にて出會ひ 五 葉

二合嘘開けたまごころへ鹿が来る 芦 福

二合嘘冷たいこゝろを詫ひ乍ら 紋 太

母親と叔母と姉との二合嘘 波 郎

二合嘘少し残して二人起ち 飯 山

二合嘘一口づゝの泡を見せ 馬 行

君と僕と君と君との二合嘘 松 郎

二合嘘富士は見えたり隠れたり 蚊 家

風呂敷にはみ出している二合嘘 同

二合嘘きつちり解ふて先へ去に 路 郎

二合嘘もうこの日曜で散るで 同

五 客

二合嘘買つて忘れたものは無し 世間坊

又股の下へ置いとく二合嘘 五 葉

やる方へ頼んで廻る二合嘘 史 風

友達に半分飲まれる二合嘘 悠 々

むつかしく二合嘘、猪口へ注ぎ 芳 翠

(人)二合嘘岩に碎けた音を聞き 悠 々

(地)花は花大工一人の二合嘘 波 郎

(天)「萬歳」にすら、並ぶ二合嘘

慰 め 互 選

愛人に慰められる死が迫まり 芦 穂

慰めるつもりでキツスしたが、 かずを

明衆に慰められてもう半期 突支坊

慰めてきてそれからの黒い腹 松 雨

慰めるつもり泣かしてしまふ也 鷹 歩

醫者にたゞ慰められて瘦てゆき 屏三呂

慰めてさあくく立たす 波 郎

慰めて呉れぬ今宵を淋しがり 郎 翠

慰めてやるのに少し嘘を云ひ 元 山

今日切りの慰め汽車の窓に立ち 幸 堂

慰める母は活花さしかへる 柳 人

慰めへたゞ首筋が白う見ね 上 ける

おのづから慰めてゐる寐息也 蚊 象

慰めてやればよけいに腹を立て 蚊 十

慰めて呉れるそれさへ腹が立ち 世間亭

慰めの一つウキンド見て戻り 飯 山

慰めた後は二人でみ飲に行き 青影子

慰めた後は無言の茶をすゝり 同

につこりさして慰めは受けた 眠 聲

慰めておいて一足先きに立ち 同

慰めて喧嘩の譯も少しきゝ 一 路

慰めに父はつておけほつておけ 同  
 裾を拂つてやるが慰め終ひなり 多聞  
 慰めてゐるこ眞赤な月が出る 同  
 慰めを云へば云はれる顔をする 水府  
 慰めをいふ方だけの巻煙草 同  
 慰めてやるのも義理の妹なり 花童子  
 決心の色に慰めやうがなし 同  
 お互ひに慰め合ふて戀こなり 好浪子  
 此の孫に慰められておりまする 同  
 靴下をはきく妻を慰める 史風  
 慰めたつもりで返す里の母 同  
 慰めて第二の法を取れこ云ひ 馬行  
 ストライキ慰の顔の近所来る 同  
 慰めてやれば涙を光らせる 一柳  
 ちこ無理な理屈を云ふて慰める 同  
 慰めて置いて話を切り變へる 同  
 慰めてはけまして叔父歸へる 一休  
 好い加減なだめて隣り歸るなり 同  
 慰める中にも友のあたたか味 同  
 慰める涙は清いものゝうち 乾坤  
 言ひ過ぎたゞけを淋しく慰める 同

もう泣くに及ばぬ背なは撫で 同  
 慰めに來て親類の人に會ひ 秀哉  
 慰めに來て葬式の用を足し 同  
 慰めに來た女關の亂れやう 同  
 慰めのために手紙を出しておき 二柳子  
 慰めりや桃割れだけか搖り居り 同  
 慰めてゐるかたはらに子は遊び 同  
 母も姉も慰めるのに困りきり 路郎  
 慰めをたゞ慰めこ聞き流し 同  
 慰める方の涙の光るなり 同  
 慰めてやうく箸を取らすなり 同  
 驚きは盲の白い眼が動き 鳶步  
 盲から意外な噂聞かされる 芦穂  
 櫻もう咲いてますがこ盲聞き のほろ  
 ふこ盲歩きながらに笑つて居 百石  
 盲判因果は暗いここへ行きき よし  
 泳いでるやうに盲は馬をよけ 多聞  
 戀もなく盲に又も春が来る 双柳  
 聞き馴れた聲に盲も振り返り 一柳  
 溝板を左で踏んで盲出る 悠々

盲にもはつきりわかる堺筋 しける  
 親切を盲は感謝するばかり 元山  
 名人の域に達して盲なり 一路  
 保己一も憂鬱になる春こ秋 かすを  
 盲今日思はぬここへ突當り 青影子  
 盲の子こか淋しい笑ひ顔 乾坤  
 阿呆臭い事は盲に突當り 好郎子  
 飛行機へ盲やつぱり上を向き かほる  
 涙ある人に盲は手を引かれ 輝翠  
 當られて盲は愚痴を言ふだけ 同  
 來月に盲は耳をかたむける 琴月  
 盲ですからこ詫びるも哀れなり 同  
 さあ殺せこ盲は棒を振り廻し 悟郎  
 道普請盲めくらに云ふてやり 同  
 年頃の盲へ赤い帯をさし 刀三  
 盲たゞ春風だなこ思ひ 同  
 三味を弾く後姿も盲なり 蚊象  
 お座敷の真中に盲待つて居る 同  
 いたずらへ盲は杖を取り直し 一休  
 見たように盲こ盲この話 同  
 盲でもあなたこ心悪う撫で 松郎



ふんくゝ盲だんくゝ上を向き 同  
 著昔機盲笑つた顔で聞き紋 太  
 ちんまりミ坐つて盲風を聞き 同  
 四つ辻の風に盲は立上り 芳 翠  
 きつちりミ盲は羽織着て 歸り 同  
 きこへでも盲の母を連れて行き 世間亭  
 夕刊を買ふにいつもの盲るす 同  
 新聞を踏んで盲は淋しがり 水 府  
 柿の色だけは變わてゐる盲 同  
 世の中に遅れず盲喋る也 五 葉  
 盲の子少し遅れて手を引かれ 同  
 捨てられてからの盲に金が出来 路 郎  
 うれしさに盲は一つ踏みはつし 同

## 二 柳子居小集

四月九日

人 妻

冗談にしこいて歸る人の妻 古城山  
 人妻に成る頃二階断られ 同  
 人妻に八百屋の世辭が露骨過ぎ 同  
 二へんめはもう人妻ミなつた文 馬 行  
 人妻へ案に相違の五六人 同  
 けろりつこして人妻になり了せ 同  
 人妻ミ春の日和をほめてゐる 刀 三  
 人妻ミ族のはぢくを見てゐるなり 同  
 人妻の哀れは指の白さかな 同  
 生きてゐたばかりに人の妻ミ 同  
 人妻がまだ戀は優しを唄つてゐる 同  
 人妻だくゝミきこからか叫び 松 郎  
 かたづいた事を母親聞いて來る 同  
 人妻ミいふ字一パイ書遣し 同  
 人妻の子役ばかりの聲を聞き 同  
 今はもう他處へかたづいてゐる 同  
 人妻のまむし一つをたひらける 同  
 人妻の手柄を思ひ眼を思ひ 路 郎  
 人妻のきつちり坐はる旅の留守 同  
 人妻のてかく光る鼻の先 同  
 人妻ミあまりに近い膝ミなり 同

近 頃

人妻のゑくほを憎う見て通り 同  
 人妻に点を入れてる二階なり 同  
 人妻のあまりに僕になれくし 同

近 頃

近頃はさんミ來ぬなミ淋しがり 馬 行  
 近頃のたより聞かせミほつこ 同  
 近頃の不如意を知つた病上り 古城山  
 近頃はさゝいな事も母に宛て 同  
 改心をして近頃の身の淋し 同  
 近頃は慰むべくもないミいひ 路 郎  
 近頃のミは知らないがねミ意見 同  
 近頃は店に魂入れてゐる 同  
 あのすし屋まだあるミ母は訊き 松 郎  
 近頃はなだめる方にかゝつて居 同  
 出不性になつた近頃の父 同  
 近頃に珍らしく見る木藥屋 同  
 近頃は隣りの方が儲けてゐる 刀 三  
 鶏を賣つて近頃遊んでゐる 同  
 近頃は米の白さが樂しみだ 同  
 近頃は父も理解をしてくれる 同  
 近頃は家内の方が肥わてゐる 同



# 郊外 電車 温泉 行脚

麻生路郎(句三文)

吉岡鳥平(漫畫)

## 諾と否の娘さん達

— 阪急線・寶塚温泉 —

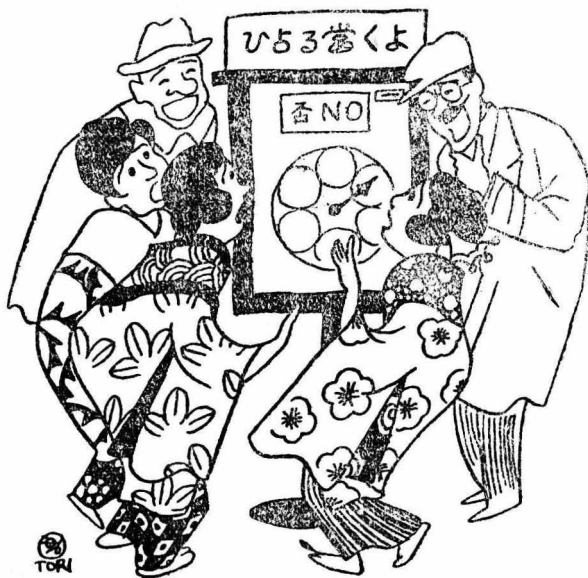
寶塚温泉遊戯室の裏。「よく當る占」の前に立つた鳥平くん變な針を一寸廻した。その指さすところを見るに「理想の戀人が出来るでせうか」さ普かれてある。萬人環視の中で、よくもこんな厚釜しい文句に針が持つて行けたものださ感心してゐる。さ、ポトーンといふ錢の音がしたかと思ふに「諾」が正面の小さな穴にあらはれて直に消れた。鳥平くん聊か得意の顔色、更に「女難の相があるでせうか」に自物を發揮する。再び「諾」が出た。フフムーンと云つて眼で笑つた。最後に「金持になれるでせうか」は愈々あつかましさの至りである。これ又「諾」

に大いに嬉しがる。そして君もやつて見給へこ来た。おすゝめがなくとも、オツミよし／＼でポトリと錢の音。理想の戀人が出来るかしらと思へば「否」女難の相もこれ又「否」せめて金持にはなれるだらうと思へば意外にも「否」この機械は「諾」が三回出て「否」が三回出るんだぜ。人を食つたものださ憤慨してゐるさ黒山の人だかり。何事が起つたのかと思へば私達二人を見物してゐるのださ知れて「動物園ちや無いぞ」さ更に憤慨。

同じ占へ、若い娘さん達が立つた。お互に譲り合つてゐて果てしがつかない。そこで事件を進行せしめるべく「その針をさつかへやつて御覽」さおせつかいを試みた。やう／＼にして美しい娘さんが一人進み出た。「將來の自分は幸福でせうか」

へ針はりを持って行つた。流石さすがに心得たものであつた。

「將來しやうらいの自分じぶんは幸福しあふでせうか？それは實じつに意味いみ慎重じゆうじゆうだ。」「諾イヤ」  
が出た。彼の女おんなは顔をあからめた。他の娘むすめさんが「否イヤ」を不安ふあんな



眼めで眺ながめた。斯こうした一寸さつぷんした遊びあそびにも若い娘わかめさん達の心こころをきめかすものがあつた。「否イヤ」の娘むすめさんよ。電車でんしゃで怪我けがをしないやうにお歸かへりなさい。

同窓どうそうを舞臺ぶたいに見てゐる寶塚たからづか  
舊温泉ふるおんせん指さすだけで引きかへし  
寶塚たからづかへ一緒に رفتいつたきり別れ  
寶塚たからづかを探たづねがした果ての保護願ほごがん  
バラダイスさほつたやうな顔かほもせず  
奥おくさんになつて來てゐる寶塚たからづか

## 釣橋つりはしと滑臺すべりだいが特色しよく

—阪急支線・甲陽温泉—

甲陽公園こうやうこうえんは廣ひろくばへ玩具おもちゃをぶつちやけたやうなところだ。莫迦ばか  
々々しいミニはアメリカ式あめりかしきだとも云へる。「何か見みるものはあ  
りませんか—」と聞きいたら「さうですね。東亞とうあキキマの撮影場さつえいじやうが  
あります」には一寸驚おどろかさねた。

歌劇場かぐくじやうでは幼童組おとこどもぐみの「野崎のさき」をやつてゐた。小ッほけなお光おひかり  
つあんがませたしぐさをしじゐたが、それでも日本人にほんじんには野崎のさき  
は嬉うれしいもの、一巡ひとめぐり廣ひろくばを歩いて見た。

「猿さるは女おんなや子供こどもが嫌きらひですからあひてになつては不可いけません  
」といふ珍めづな立札たてふだがあるかと思へば、枯かれた菊きくの木伊乃きのい乃のが仰山おほやま  
相あに並ならべられてあつた。こゝの特色しよくミニ云へば釣橋つりはしと滑臺すべりだいであ  
らうか。「夏なつが來たらよろしうおまつしやるなア」ミニを負かふ  
た女おんなが歸かへりのプラットフォームで喋しゃべつてゐた。停留所ていりゅうじよの改札かいかが  
首くびに鞆たもとをぶら下げ、巻煙草まきえんそうをくはへたまゝ、プラットフォーム

を往きつ戻りつしてゐるのは如何にも物騒さうでいよ。



甲陽の人出運動會を見ぬ  
釣橋のミこで女は引つかへし  
ロケーションを休んで國の母に逢ひ  
甲陽の重役室ヘラヴレター

### 家族風呂の見學振

— 阪神沿線ラジウム温泉 —

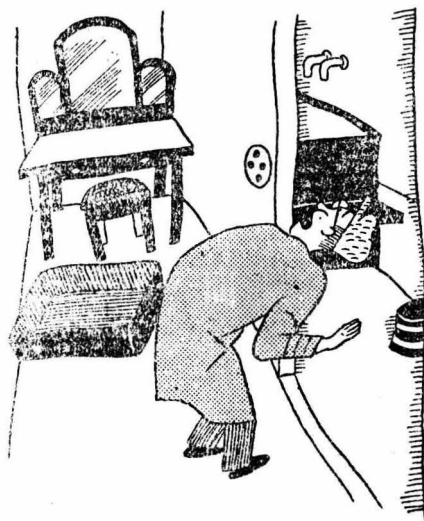
苦樂園の三笑橋のほりりりで自動車を乗りすて、ツイミ六甲  
ホテルへ這入つたミ云へば急にブル階級になつたやうに聞ける  
が、自動車は乗合ひだし、ホテルだつて紅茶やカクテルであつ  
さりミ、ブル式寮園氣にひたるに過ぎないのだ。早速ボーイさ

んが石油ストーヴを提て来て、鳥牛クンミ我輩ミの間に据わて  
くれた。

「矢張り、いつもの暖爐がい、ね一ミ度々來てるやうな口吻を  
洩らす。『瑞西のロザーンの景だミいふのは、あの邊だネ』鳥  
牛クン、ホテルの露臺から遙か下手にある池のほりりや眺めて  
ゐる。

我輩は  
その瑞西  
のロザー  
ンが、ミ  
んなミこ  
だか知ら  
ないので

「サア：  
…」ミ云  
つたきり



である。せめて繪葉書でッも見ておけばよかつたのにミ思つた  
が、しかし鳥牛クンだつて、實際ロザーンへ行つたのではないら  
しいからちよほくだ。間もなく此處を引きあけて、家族温泉  
の見物に出掛けた。十五六の女の子が案内してくれた。

「この釦を押したら水が出まんね。これやミお湯で、これがよろ

し、これが給仕を呼ぶ時に使ひまんね」「フォーム、それで鍵は……」「斯うしたらかかりま……」「云つてビーンこパネをあけて見せた。

苦樂園ビクニツクでもやりませう

苦樂園寝轉べば雲走るここ

蒼空へ松風亭の石の音

苦樂園誰が來てるか記者に逢ひ

苦樂園又外人に追ひ抜かれ

苦樂園仲間居士で髪を結び

### 遙々來て温泉探し

— 京津沿線・大谷温泉 —

「大谷温泉てい一體何處やろ」「さうほけな停留所へほり出された二人はほかんさしてゐた。

斯くてあるべきにあらねばきて山に沿ふた席貸の方へ登つて行つた。衝立のある女闖で道は行きつまつた。「御免ツ」「今日はツ」と突拍子もない聲。飛んで出たのは四十前後の女。

「大谷温泉は、さつちへミつて行つたらよろしおまつしやろ」

「眞面目くさつて聞いてやつた。「温泉だけだつか」」女はあきた様な顔をしてゐる。

「浮世離れた二人の耳を樂しがらせるほごぎす云ふ大谷温泉を探してまんね」

女はます／＼あきれる。まアあがれこも云はぬ。野暮な二人では下さらぬと思つたらしい。何んの料理屋の内湯なら大阪に何百軒でもおまつせよ云つてやりたかつた。



大谷の散歩走井のぞいて來餅買ふて父平の橋訊いてゐる温泉の客にかねよは見降ろされ

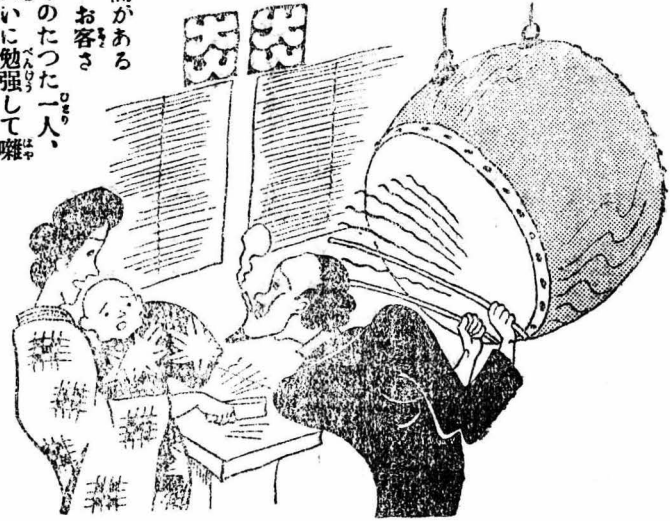
### 一家團欒の囃し方

— 大軌沿線・日下温泉 —

日下温泉は天女池の向ふに巍然として聳つてゐる。こゝからは河内平野を隔て、大阪が一望の下にある。歌劇のお嬢さん達

は旅を稼いでゐらつしやるそつで、ひつそりかんこしてゐた。その替りミ云つては失禮だが黒幕座こいふのがかゝつてゐる。もう間もなく餘興がはじまる。聞いて餘興場へ足を運ぶ。×××

喜劇「人の子」一幕こいふピラが下つてゐる。まだ除期間があるのらしい。お客さんらしいものたつた一人、それでも大いに勉強して囉しの太鼓がドンドン、ドンドン響く。我輩は、その方へ失敬した。其處には若いやさ形のハイカラが赤ちやんを抱いて天井からぶ



ら下つた大きな太鼓をたいてゐた。そこへ突如としてあらはれたのは三十歳前後の長髪の男、巻煙草をくはへたまゝ、女から鞭をうけ替つて太鼓をたく。そして赤ちやんにおごがひをしやくつて相手になつてゐる。女は蒲鉾の板のやうなものをこつて、カチャ／＼合の手を入れてゆく。實に一家團樂の囃しであら。唯し方兼道具方兼作者兼役者？の××××××××に敬意を表して、ドン／＼、カチャ／＼、ドンドン、ドン／＼こいふ囃しをあみに此處を辭した。

日下では燕のやうに稼ぎに出  
日下から二人は奈良へ行くつもり

### 五錢で女ご押問答

—大鐵沿線・沙の宮温泉—

こゝは沙の宮温泉の人口。烏牛クンは風邪で湯は御免を蒙りたいとおツしやる。でも入湯して貰はねば僕の方が困る。そこで入浴券のお係りの人に温泉を見せて貰ひたいと掛合つた。「僕は入浴するやで……なんほや」と聞く。「五錢だよ」「なんや五錢かこゝの温泉は莫迦に安いやな。そやあつたら出さう」「いゝゝ不要しまへん」「五錢位まけて貰うたかて仕方がないから……」ミ今度は少し大きく出た。「五錢位だすよつてよろしうおます」ミ又暫くは押問答。遂に女に云ひまかされた

女さいふものは仲々強くて親切なものだミ、つくづくさう思つた。

鳥平くんは藤椅子に腰をおろして暮れてゆく千代田橋のはミりを眺めてゐる。我輩は地下室のやうな感じのする湯槽に首だけ出してちやぶくくやつてゐたら四十格好の男が這入つて来た。

「こゝは何にききまんね」  
「痔や疝に利きます。痔や



あつたら一遍だす」ミこもなけにいふ。「藝者やあつたら長野から來ます。たんまるまッせ」ミ聞かぬミまで話して呉れた。

亡命のやうに來てゐる汐の宮  
長野でもよぼうかさいふ汐の宮

御近所の人も來てゐる汐の宮

### 混浴ちや 混浴ちや

—南海沿線小川温泉—

小川温泉の小川館の廊下をドスン／＼と歩くと、仲居もドスン／＼と歩くと、ドタ、ドタ、ドタと走り時もある。湯上りに白い物をつけ

てゐる。  
ひなには  
稀な美人  
だミ相棒  
の鳥平ク  
ン無闇に  
うれしが  
る。



部屋に  
おさまつ  
たら、床  
の間に丸  
菱のランプがある。うれしがつて晝日中に點燈させる。廊下の懸行燈もうれしきもの一つ。  
仲居さんの案内で内湯に入る。入口が二つある「きつちが女

湯ぢや」を聞く。「さつちなまご好いた方へ這入んなはれ」このたまふ。「よし来た」を飛び込んだら、さつちの入口から這入つても同じ湯槽だ。十七八の娘さんが三人這入つてゐる。「こゝは男女混浴や。こは嬉しやま山伏も」を動進張張りで飛び込んだ。こんな時には人間勇氣がなけらな駄目ぢや。

巡禮を遙に見てる小川館

小川では醫者で癒らぬやうに云ひ

(一九二五、一月)

## 行末

霹靂 火

「妾ほんまに淋しいわ」

これは彼の女の言葉であつた。

もう別れてから幾年になるだらう。

ほんまに彼の女は今、さうしてゐるだらう。

それを思ふまゝ僕はたまらない。

彼の女はほんまに私のこゝろもちを理解してゐた。

けれども僕にはゲルドがなかつた。それを彼の女はきんなに悲

しんだらう。

僕にゲルドが無いさいふ、たつたその一事が彼の女の操を何處の誰だかわかない男にわたしてしまつたんだ。

行末はさうあらうとも火の如し

これは僕の句だ。

私の熱情は今もさめない。

私の夢は今もさめない。さめる時は私のいのちの終る時であ

らう。私のいのちは彼の女の魂、まごもに舞踏してゐたんだ。

あの我が儘な彼の女は、今も盛んに酒に煙草に朝寝に八八に今の男をなやませてゐることだらう。

あゝ、僕は矢張り元の僕だ。けれども彼の女を失つた僕だ。僕

には妻も子まももある。それが彼の女に何んな關係があるだら

う。ねわ。さうぢやないか。僕は酔つてるやあしなないんだぜ。

ねわ、君。しつこいやうだが酔つてるやあしなないんだぜ。

ビール、アブサン、コーリヤンチュ、それがなんだ。さうした

さいふんだ。女は私から遠く／＼離つて行つた。影もかたちも

なくなつた。それがさうしたさいふんだ。

私の思ひ出は綿々してつきない。達者でゐてくれ。な。な。

時々俺は淋しくなる。だけき人世は踏切に立つた瞬間の氣分だ

地球はぐる／＼回轉してゐるんだ。さつかの果でまた逢ふこゝ

もあらう。

達者でゐろよ。

(ゴールドン、スターにて)





本號近作柳権の中から左記三氏の句を交るべく批評しました。こゝに批評する句は必ずしも絶對的佳句だまは限りません。たゞ批評してゆくうちに、何等かうるまゝころがあればそれで目的は果されたわけです。(略)

たゞかれた巡査の肩に埃りが出 盗 泉

(松) 單純やな。

(馬) 友達やな。

(松) さあ、そこが問題や。

(古) 僕も巡査の友達だと思ふ。

(松) 第一場面がはつきりしないね。たゞかれた巡査は非番の時か勤務時間の時か不明である。

(馬) その場合、巡査であるからは勤務時間である。そして場面は非常にはつきりしてゐます。犯人を捕へる場合だと思はれ

# 句 評

路 古 松 馬 葭  
 城 城  
 郎 山 郎 乃 女 行 郎 山 郎

ばたゞかれたでなく、なぐられたとする方が適切だと思ひます。

(松) 場面がはつきりしないといふのは巡査の勤務時間に同僚に肩をたゞかれるといふやうなことをあまり見うけない。車掌や運轉手なきに同僚にあつかつてゐるやうに思はれるからである。巡査が勤務中に同僚に肩をたゞかれるといふ場合は公衆の前ではないが、交番所又は教習所の如きところならばないこともなからう。馬行君のいふ犯人の場合ならばたゞくといふよりもなぐるといふ方が適切であるといふ

意見には賛成であるが、これは狂人が醉漢にたゞかれた場合のユーモアを感じた句だ。解釋した方がいゝだらう。こゝろが巡查向土が肩を叩くといふこゝろはよく見うける。埃が出るまでたゞくといふこゝろはさうかと思ひますが、そこが川柳の見つけきこゝろで、誇張の句にしてみこめていいと思ひます。

(路) それで僕が云ひませう。塙面としては充分はつきりしてゐると思ひます。松郎君のはあまり六ヶ敷く考へすぎてゐるやうだ。これはホン路傍の一觀察に過ぎない句で、この句はうららかな感じが出てゐる句だ。埃は誇張でもなんでもなし。巡查の服からは事實ホンミ肩をたゞけば埃は立ちます。同僚であるといふこゝろに對しては意見はあゝよい。勤務中であるこゝも勿論でせう。こゝろでこの句の價値についてはどうです。

(松) お説のやうに埃が立つといふので路傍の巡查があらはれてゐると思ひますが、それだけでは、あまりに平淡であつてこの句をさきほご申しましたやうに狂人が醉漢にたゞかれたといふ解すれば句の價値が高まるかと思ひます。

(古) 松郎氏の云はれるやうに作者は深く考へて作つた句でなく、たゞ路傍のスケッチとして成功した句だと思ひます。

(松) 僕の解釋も矢張りスケッチで古城山氏の云はれたやうに深

く考へた句であるとは云はなかつた積りです。

(路) この塙面、肩をたたいたのは狂人であるが酔ひぎれであるといふこゝろは句の上から看取することは出来ないから單に同僚に軽くたゞかれた春日のうらゝかさ位に解釋していいと思ひます。スケッチであるこゝろはいふまでもありません。極單純な場合で、頗る平淡な詠み方ではありますが棄てがたい句です。それでは次に移りませう。

御馳走が出るにはあらず繪具皿 波 郎

(馬) これはさういふ塙面を詠んだ句でせうな。

(古) 修辭法が完全でない爲に句意がすぐ頭へピンと響かない。

(松) 僕も句意がわかりません。

(腹) そのまゝの句ではありませんか。よく解りますが。

(路) 解りすぎてゐます。單に繪具皿が幾つか並べられてゐる場合であつて、作者はこれを技巧の上から川柳にまごめたに過ぎません。全然御馳走の出ないこゝろは蛇足をつけるまでもありますまい。

(腹) 妾の申しますのは友達が來て、雑談をしながら何か寫生でもする氣で繪の具皿を出したのを觀察してこゝろ詠んだものだと思ひました。

(路) それでよいでせう。

(馬) いやよくわかりました。

たまに逢へばさうしませうを連發し 柴舟

(松) いゝ見つけきころをつかまへて、巧く云つてあります。年の若い人には到底うかばない想です。しかし難を云へば下五「連發し」が少しいけないと思ひます。

(古) その場合の「連發し」は難でないと思ひます。そして「さうしませう」みたいな言葉を入れたことは實に味のあることゝろだと思ひます。

(馬) 僕の好きな句です。いゝ句です。松郎氏が云々された下五は一寸賛成出来るし、一寸賛成出来ぬやうでもあるし、何と云つたらいゝでせう。

(松) これは想ご云ひ調子さひひなだからかに出てゐるのであるから下五の「連發し」を「繰返し」にすれば申し分のない句です。

(霞) 若い想思の仲が目に見へるやうです。「さうしませう」の言葉で、若いあきない女の態度が目に見へるやうです。思ふに柴舟氏實感の句であらう。下五の調子は松郎さんと同じ感です。

(路) 尚乃の解で充分盡されてゐると思ふ。作者はまだ句作年限の浅い人であるが川柳には随分古くから親しんでゐるだけ

に、さうした境地を掃へ得たものであらう。もう少し川柳上の技巧がすゝめば松郎君の云はれる「繰返し」も出るべきであつたであらうと思はれるが、この場合の「連發し」は大して非難すべき程度のものでない。

こゝ正直に眞正面に詠んで成功したさいふのは全く實感説の出で来る所以である。

(古) 私は作者を知りませんが、この句によつて作者をほゞ推察するこゝが出来ます。

### 前號句評正誤校正子

本誌前號句評中、二二頁下段十二行目の「さうした方面を詠んだものであつて」は「さうした方面を詠んだものでなくて」の誤り。二三頁上段一九行目二〇行目及び下段七行目中の「前書」は「前書」の誤り。二三頁下段一四行目の「あこで優しい氣にもなり」は「あこで優しい氣にもなり」の誤り。

二五頁下段八行目の「よくある柄である」は「よくある事柄である」の誤り。二五頁下段一八行目中「いゝ、皆他處はんの仕立物」は「いゝ、皆他處はんの仕立物」の誤り。

川柳家の戸籍調へ

保馬 行生



川柳塔

森田 輝翠

絹物の父親 瘦せの目立つ事  
 皮肉にも自動車牛に曳かれたり  
 たゞの酒良にかゝつたさも知らず  
 米國の兄弟に金を借るつもり  
 冷やかな父が家出を迎ひに來  
 頼まれて不義理な嘘を云ふ日なり  
 心地よき炭火にほのほ見る如し  
 お情けで此處まで世話が行届き  
 花咲いてちみ金策に苦しむ

○ 高橋古城山

近所では顔が利く程女房老け  
 よく遊ぶ子に物尺が見當らず  
 濕布して來てる女給を汚ながら  
 轉寢が火鉢を押して叱られる

◇ 保馬 行生  
 (一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配偶者の有無(一二)さらひなも(一三)川柳に手を染めた年月

(四)川上 日車

(一)川上卯治郎(二)日車(三)結晶(四)近江國八幡町鍵の手一〇地(五)明治廿九年九月十二日(六)無職業(七)葦葺の俳句、半文錢の川柳・柳珍堂の川柳(八)ナン(九)今思ひ出せず一〇思案一一妻三十四歳三女一男が親(一二)ナン(一三)明治卅七年。

(五)岡本 映絲

(一)岡本永四郎(二)映絲(三)醉鏡亭(四)名古屋市南區熱田富江町二三(五)明治二十二年十一月二十四日(六)會社員但重役になれる可能性を有せず(七)きの句がいゝき一句を探すことはつまらぬと思ふが、讀んでピンとした點のある句(八)肉中脊にして目と鼻と口とが調和した其中の一の爲めにプチ毀して居ない顔、使ひ憎くても何事も委し得る性質の者(九)今思ひ出せず(一〇)撞球、卓球(ピンポン)(一一)有(一二)野菜類(一三)明治四

面白く見る居眠りの父の髭  
爛番の眼にも鼠の多いこと

○ 徳田 双柳

東京へ行くのへ逢ふた朝の風呂  
洒落云ふて舞妓今度は僕に酌し  
ウエータへ自働電話からかゝり  
眞相がさうのさうのさはかきらす  
偽りの汗を主人の前で拭き  
廊下迄出て偽りが怖くなり

○ 塚崎 松郎

佛壇に母は息子の事ばかり  
終電車泣く子を抱いたやうに揺れ  
新開地また鶏を盗まれる  
轉任をして来て青い蚊帳を吊り  
彼れはこう云つたさ書いて煙草にし  
白足袋を履いて養子の聲になり  
夢を見るたび國の母文を書き

○ 高橋 かほる

揚詰のたつた三日で氣が變り  
陳列に勾配の要る壽し屋也  
見本程一文菓子屋賣れ残り

十一年新文林といふ雑誌に投吟したが始  
まり。

(六) 小田 夢路

(一)小田久吉(二)夢路(三)別號の發表を  
する位なら雅號を使ふ程度のもの四五あ  
り、安全なのは其館堂主人(四)大阪市此  
花區野田驛前(五)明治廿六年十月十四日  
(六)工作機械(七)番傘の句の大部分(八)云  
ふ句風(八)木下八百子の日本鬚の姿で木  
下吉之助の氣分で薄化粧の靜かな女が好  
き(九)自信の句ではないが好きなのなら  
樂すぎる眼に人様の癖が見ゆ(一〇)芝  
居、落語、旅行、通信(蒐集趣味(一一)  
配偶者はないのに子供が四人あり(一二)  
浪花節(養た魚(三)喧嘩は負けるに決つ  
てるから嫌ひ、(三)恥しい乍らカラヤ  
ナギを讀んで活動寫眞雜誌に秋月(名乗  
つてゐたのは大正四年頃、川柳界を知つ  
て大正七年の夏膽寫板誌發行、初めて句  
會に出たのは大正八年五月五日繪日傘の  
句會。

(七) 若林 吐露樓

(一)若林忠雄(二)吐露樓(三)生田敬甫、  
紅坊(四)山口縣山口町新道山下(五)明  
治三十四年一月三日於而大阪市(六)目下  
失職中(七)澤山ある(八)黙つて坐つてゐ  
る女、日本趣味保存の女つまり(桃削、  
口紅、黒襦子の襟)なきを(九)好い句(

天窓の三つ四つあるも印刷屋  
精神的になき、中々如才なし  
指先きで煙管を廻すゆすり也  
別宅ささいふ中庭にシウロ竹

○ 林田馬行

嬉しさの三町程も續きけり  
この頃になつて養子に行く云ひ  
一人きりるるのを好む子を案じ  
友二人哀れな死骸貰ひに來  
丸刈の方が好きよこ許嫁  
子の不平知りすぎてるる父淋し  
五年先軽く請け合ふ母の前

新婚生活 竹内多聞

春の夜に浸つてゐるさ睡くなり  
行つて來るミ玄關に立つミ新派めき  
斯ふもしてれますのやはさうづかれ  
春の夜のわれを愚かな殿に見る  
花の夜の枕許の衣桁は赤かつた  
敵討のやうな禪の臺所  
椿咲いて笑はぬ妻さなりにけり

○ 岩崎柳路

思つてゐても、漸次嫌味のところが出來たりして仲々自信が持てぬ(一〇)園基、寫真、歌留多等、何れも下手好き(一一)目下選定中(一二)女子大學出身、待たされる事、蜥蜴、(一三)創始——大正八年の初夏、復活——大正十三年の秋。

## 編輯後記

▲素裕に次いでセルの着流しのすがく、しい、初夏のそよ風に頼まなぶらる、よい時候になつて参りました。若葉もやがて青葉に茂り、日傘さす女、袂にすねて町々のいきれに打水そくぐのも近い事と思はれます。

▲本誌も創刊以來愛讀者並に寄稿家諸氏の御後援により遂次發展して参りましたので本誌發行日を繰上げ本號より毎月一回一日發行致しました。

▲前號に發表致しました本社主幹令閨殿乃女史の安産に付いて、多數の諸氏より御祝辭を賜はりました事を厚く御禮申上けます。因に分晩後のお二人共至つて健

外國のやうにも思ふ丸の内  
當てつけたやうに車掌はドアを閉め  
ロケーションあの電柱が邪魔になり  
打合した筈が待合所には居ず  
汽車辨で花見と話決るなり

○ 關本雅幽

春の日を死を知る憐れ汗をかき  
川底を眺め一輪逆に咲き  
名も知らぬ俺に半衿正し行く  
あがるみへ出て来て蚯蚓死んで居る  
血湧き肉踊り山水親しめず

○ 平井光太樓

お隣りの子も呼んできて五目ずし  
換抄をさす子の涕をかんでやり  
膳立てをして縫ひさしへ亦坐り  
子が故に今年は蚊張を早く出し  
新世帯雨に嬉しう迎ひに出

○ 麻生霞乃

爛瓶の酒春らしく光る也  
失職を氣にする母と妻と兒と  
ブラウドが矢つ張りのかぬ居候

在であります。尙お子さんの名は、リリ

さんご名付けられました。

▲本誌寄稿家、石井省二氏は石井姓を、  
蛭子と改姓されました。

▲同人花童子の來阪に際して、別記の通り種々歓迎會を催して遠來の珍客に親し

## 六厘坊忌

日時 五月十七日午後六時

場所 大阪市南區清水町停留所西入

## 端の坊

乘取「薄着」三句路郎選

會費 金貳拾錢

句會に出席したごさない人でも御遠慮なくいらつして下さい(幹事)

く接した事を欣びます。

▲本月の本社例會は別項に依る、關西柳界の先輩 故小島六厘坊氏を偲ぶ爲の句會を催します故、精々御來會下さる事を望みます。

▲尙本月下旬 同人古城山氏主催、本社

かまきりに見ゆる世界は露の原  
産梅の日の水かつたはこべ草

○ 黒木 莢 豆

新婦ふこしやれのわかつた笑ひ顔  
よく賣れるので變屈を出してゐる  
愛嬌のつもりあられもなくしやべり  
夢にまで意氣地ない身をみてくらし  
かゝはりはないぞミ街がならんでる  
それミ見せそれミ見せない年増なり  
食ふだけは米も残してあるはいな  
畦に立つあれが地主かふころ手  
さあ起きて日向へこいミ母の聲  
ひばり啼いたきてまぎれましょかね赤椿

○ 橋本 二 柳 子

酔ふたのを避けく来るは女連れ  
女の子もうダンスをばまねるなり  
特徴があつてさん附けされてゐる  
服脱げばもう膝へ来る娘なり  
荷造りもミかす死顔ながめてる  
勘當の子まで呼んでる父の死後

及び番傘、大大阪、三社後援の下に、過般故人になつた左和右平氏の追悼句會を催される事になつて居ります詳細は追つて案内されるさうですからこれまた盛んに御來會を願ひます。

▲本誌前號近作柳樽中失名ミある句主は椿薫流氏であるミのこゝを同氏より申出がありました。

▲本誌前號は大分誤植がありました、責任者の松郎がこゝにお詫致しておきます

▲本號は記事輻輳のため募集句その他已むなく次號に廻した原稿が可成りありました。御諒承願ひます。

▲同人松本助六氏は今回家庭の都合で残念ながら一時同人を退かれる事になりました。復活の日を祈ります。

▲同人宮内一洲氏嚴父は三月十八日長逝され、同人柳川洲馬氏の嚴父も三月下旬長逝されました。共にお悼み申します

▲大阪柳壇初朝以來の作家、今場常坊氏は四月十二日長逝されました、お悼み申します。  
(松郎)



▲道頓堀川にかもつた日本橋を南へ渡つて牛丁も行かないところにある古本屋です。

▲主人公藤堂氏は愉快なおぢさんです。とても古本屋のおぢさんとしては珍しい人です。

▲古本を漁りながらいろんな話をしてゐれば道頓堀を歩いて来た感じが流れるやうに出て來ます。

▲こゝの特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかせておいても安心して買へること云ふこと、買ふさか買はぬさか云ふことを問題にせずに愉快に本を見られるといふことです。

▲せいぜい主人公さお馴染みになつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出来るだけ便宜を興へて貰へます。(路郎生)

**古**

**本**

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

# 投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記する(100)。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する(100)。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

# 募集

## 第二卷第七號課題

五月廿五日締切  
(各題二十句以内)

- ▼床上げ 蛭子省二選
- ▼釣瓶 龜井花童子選
- ▼駈落 橋本二柳子選 岩崎柳路共選

## 第二卷第八號課題

六月十五日締切  
(各題二十句以内)

- ▼三味線屋 坂井久良岐選
- ▼鯛 柳川洲馬選
- ▼親類 西垣松雨共選 高橋かほる共選

## 每號募集

- ▼近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

# 價定

一部 參拾錢(郵)  
六部 壹圓六拾錢(郵)  
十二部 參圓(共)

# 廣告料

本誌の廣告に就きましては本社へ御接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は掃替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年四月廿五日印刷

大正十四年五月一日發行

第二卷第五號  
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人

麻生幸二郎

印刷所

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地  
大阪市東區農人町二丁目七番地  
藤本兄弟社

發行所 川柳雜誌社

振替口座三一五一四番

# 賣捌書店

- (大阪) 明文堂 公立社 柳屋
- (東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
- (金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

# 川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

關本雅幽	平井光太樓	佐々木默闇	駒井美の作	矢田右大臣	宗清夜調	竹内多聞	高橋古城山	龜井花童子	太田徹底郎	西垣松雨	橋本二柳子	原史風	岩崎柳路
	森田輝翠	宮内一洲	麻生葭乃	柳川洲馬	黒木莢豆	塚崎松郎	高見柳骨（入管中）	高橋かほる	太田一聲	徳田双柳	二木幸堂	林田馬行	井上刀三

- |                        |                        |                      |                            |                           |                       |                           |                          |                         |                           |                              |                       |                           |                            |
|------------------------|------------------------|----------------------|----------------------------|---------------------------|-----------------------|---------------------------|--------------------------|-------------------------|---------------------------|------------------------------|-----------------------|---------------------------|----------------------------|
| 第十四支部                  | 第十三支部                  | 第十二支部                | 第十一支部                      | 第十支部                      | 第九支部                  | 第八支部                      | 第七支部                     | 第六支部                    | 第五支部                      | 第四支部                         | 第三支部                  | 第二支部                      | 第一支部                       |
| 朝鮮仁川仲町二丁目八<br>幹事 矢田右大臣 | 大阪市住吉區安立町五丁目二二<br>徳田双柳 | 國館市青柳町五〇<br>幹事 龜井花童子 | 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内<br>幹事 岩崎柳路 | 大阪市外豐中榮通二丁目石賀方<br>幹事 林田馬行 | 山口縣山口町石原小路<br>幹事 柳川洲馬 | 兵庫縣明石郡壺水村字下畑林方<br>幹事 宮内一洲 | 大阪市東淀川區南濱町一八二<br>幹事 西垣松雨 | 兵庫縣武庫郡六甲苦樂園<br>幹事 佐々木默闇 | 大阪市東區餌差町二二一番地<br>幹事 駒井美の作 | 大阪市港區鶴町四丁目十三號地嵐山方<br>幹事 關本雅幽 | 岸和田市下野町四一九<br>幹事 太田一聲 | 大阪市北區南同心町二丁目四五〇<br>幹事 原史風 | 大阪市港區八條通二丁目南小路<br>幹事 橋本二柳子 |

# 白色美顔水



▲常に若し!

この白粉の化粧作用

清新... 潤澤...

何ご自然にお若く見わて

何ご活々して見わるごこ

白色美顔水のお化粧は!

艶潤... 敷...

何ごわけなく化粧が上り

何ご手間ひま要らぬごこ

白色美顔水のお化粧は!

封よし

大正十三年三月三日發行  
大正十四年四月二十五日發行  
大正十四年五月一日發行

第二卷

第五號

定價金參拾錢